

---

# 白りんご

南川 紗結

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白りんご

### 【Nコード】

N 6 4 2 6 P

### 【作者名】

南川 紗結

### 【あらすじ】

私たちは白いりんごみたいに珍しくて、変。  
でも…人を好きになることは変わらないから…。

女の子同士。恋に落ちてわかったよ。

## 白（前書き）

これは、私自身の実体験も入っています。ほんとにつらい事も、全て「あず」に話してきました。

本当に大切なもの、失う事ができないものです。

小説の形にして皆様に届けば良いな、と思っています。

## 白

小さい頃からやっぱり少しズレていたのかもしれない。

電線の下を歩くな、と親に言われていたからいつも上目になって歩いていた。

電線を見て。自分が電線の下を歩かないように。

下を見ないで。上にある電線だけを見ていた。

そして今になってその支障が現れた。

電線の真下を歩いていれば、こんなことにならなかったのか…。

今日も明日もその先も

ずっと私は…

一緒になれないキミを…。

「何ぼーっとしてんだよ」

拓也の声が耳の奥で重く響く。

「えっ！？べつに…何だっけ？」

私の返事に拓也はめんどくさそうにだからあとだるそうに答えた。

拓也は私の彼氏だ。これといって日常にも不満はないし、たぶん幸

せなんだと思

う。でも…突然不満になる。

いや、もっと簡単にいうといらなくなる。

邪魔になるのだ。拓也が私の恋愛を愛で邪魔するのだ。

名門校とはほど遠い女子校に受かり、中2で落ちこぼれになった。

そんな人生にも

恋愛という道は確かにあった。

男子校の文化祭でナンパをされてからのぐらい時間がたつだろう。たしか私は小５だった。兄貴の学校に友達と一緒に行ったのだ。中学校見学という

ことで。

ズレていたからか、私は人よりギャルく、化粧もそれなりにしていた。ませていたのだ。

背も同年代の子よりも少し高かった。だから中学生ぐらいに見えたのだろう。そ

のとき拓也と出会った。今思えばかなり年も離れているし、そこまですいけメンで

もない普通の拓也とメアドを交換したのかわからない。

けど、そのとき確かに私は拓也が好きだった。

昔話のように遠い昔に感じられる拓也との出会いを思い出している  
と、携帯電話

のバイブがポケットに響いた。ポケットから出すと液晶には”あず”  
”の文字。拓也

の話を見無視して急いで電話に出た。

『もしもしっ！！倅奈？今暇なの。付き合ってよ。今から会える？』  
聞き慣れた、大好きな声だった。拓也を見るとムスツとした表情で  
私を見ている

。無理もない。拓也との話の方が先だったから。

「うん！いいよ。」

睨む拓也を横目に私はあずに返答をした。

貴重な一本の電話なのだ。私にとっては。

それを理解してほしい。拓也に。

一人しか愛してはいけないわけではないことを拓也はちゃんと知っ

ているはずだ。  
。

アイコンタクトで拓也と会話をした。いくね、と。

私は置いてあったバックを軽々しくもちあげた。拓也は怒ったようにこちらを見ている。でも、私はそれを振り切りように店をでた。

『今何かしてた？』

あずのこと考えてた。

「べつに何もww」

『ほんと？時間とか大丈夫？』

あずのためなら。

「大丈夫」

今すぐあずに会いたい。

渋谷のセンター街のマックがいつもの待ち合わせ場所だった。

今から向かうと最低でも30分はかかる。遠いのは了承済み。しかし、行くのだ。

あずなために。私のために。

「着いたよ」

とメールを打つ。

あずの返信はけて速くはない。むしろ、焦らされるほど遅い。だから、私はあずからの返信に胸を踊らせる。

私の気持ちを知ってか知らずかあずはいつも私の胸の奥をくすぐるように接っしてくる。

そんなあずが愛おしくてたまらない。

少しして携帯のバイブが私にメールの返信を告げる。返信内容は大体の検討はつく。

く。だけど、あずからの返信というだけで胸が高鳴る。

ゆっくりと受信ボックスのあずからのメールを開く。すると文は

「うしろ」

としか書かれていなかった。

トントン

誰かに肩を叩かれた。振り向くと指がぽっぺにあたった。そしてあずが微笑んでいた。

「遅い。待ったんだから。」

あずの指をそつと自分の手で包み込む。

触れた手が熱くなるのを私は感じる。

あずは気が付くだろうか。私の熱くなる手と高まる鼓動を。

チャリ、とあずはケータイをテーブルに置く。キーホルダーは青い水色のハート

だ。私があげた、色違いのモノだ。

口実を作ってもらってやつとの思いで渡すことができた。

キーホルダーを付けてくれているだけでうれしくなる。暖かいフワ

フワした気持ち

ちで青いハートを見ているとあずが少し笑った。

「どうしたの？」

あずはフフッと笑う。

あずの笑い方も何もかもが私をフワフワと浮き足立たせる。

「なんでもないよ！あずから呼ぶなんてめずらしね。なんかあった？」

この気持ちを悟らせないようにいつものように笑って返した。

「いや、特には話とかないけど、急に会いたくなっただんだよね。倅奈に。」

私と顔を合わせず、あずは窓からの景色を眺めていた。

”こっち向いて”

と心の中でひたすら言ってみる。届かないことぐらいわかっているけれど。

「あずはかわいいなあ。」

クスクスと私は笑ってあずの腕を自分の腕に絡ませる。

幸せだった。

「倅奈のほうがかわいいよ」

あずはさつきみたいに笑ってポンポンと頭を撫でた。温かい気持ちになった反面

鼓動が早くなる。

急にその笑顔が真顔になった。

私の後ろを見ている。

釣られて振り向くとそこには拓也がいた。

「あのかなあ。」

呆れたように拓也は頭をカリカリかく。

「なに？用があるなら速く言って。」

「この際だから言うけどさ、俺ってお前の何？」

あずとの時間を邪魔してまで聞くことだろうか。私は頬づえをした。



「お前の何って聞かれても答えようがないんだけど。」

拓也がイライラした顔でこっちを見ている。

「あたし帰えるね？」

あずが戸惑ったように席を立つ。

行かないで、私が言うよりも早く拓也が口を開いた。

「いやいいよ。あずちゃんがいなくてこいつ余計に怒るから」

あずは拓也と私を顔をちらつてみて居心地悪そうに座り直した。

なんでだろう？さっきまでの幸せはどこにいったんだろう？

拓也の何気ない一言や仕草が私をムカムカさせる。

今すぐ消えて欲しい、と私は机をガンッと蹴った。

「速く行つて。」

「は？だからなんでお前はいつもそうなの？人の話聞かないでそうやって…」

「うるさいっ！！！」

店内がザワついた。こんな修羅場をひとに見られるのは初めてだ。

「あ、あのさ、今日は拓也君ひきとってくれる？倅奈調子悪いみたいだし。ね？」

「

あずが困っている。けれど、私の中のムカムカが収まることはない。

「いや、もおいいよ。倅奈いままでありがとじゃな」

拓也が真顔で言つて店から出ようとする。

「倅奈このままじゃだめだよ！早く追っかけなよ」

あずは必死に言うが私には追いかける気はさらさらない。逆にせいせいしているぐらいだ。

「いいよべつに」

私の返事を聞いてあずの顔がみるみる悲しげになってゆく。

「こんなおかしいよ」

それだけ言つとあずは泣きながら拓也の後を追いかけるようにして

店をでた。

どうして？ただ私はあずといたただけなのに…。

少しして、あずが顔色を変えて戻ってきた。

「倅奈。明日ちゃんと謝りな。あたしより、拓也君を大切にすべきじゃないの」

「？」

「…あずには分からないよ。私の気持ちなんて。ホントにあずな事が…」

言おうとでかかった言葉は詰まって言えない。

この気持ちがバレてしまいかもしれない。あず自身は私とは違う感情を持つているはずだ。

”友達として”私に接している。元々グループも違うし同じ部活に入ってるわけでもない。

ふいに思った。

この気持ちはいつから始まったのだろう……と。

涙がこぼれた。ぼろぼろ流れ出て止まらない。

「倅奈あのね…」

「もういいよ。もういい…」

それだけあずに言っていると私は店を出た。あずごめんね。何度も心の中

でつぶやいた

。 だけどあずに届くはずもない。

中3のはじまりだった。

あずにこの想いを抱くようになったのは…。

莉緒と朝待ち合わせをしていた私はその待ち合わせに遅刻をしてしまったのだ。

。

ごめん、と待ち合わせ場所の莉緒に言うところにあずがいた。関わりは全くなか

った。むしろ同じ学年にこんなひとが居たことさえ知らなかった。

「この子、あずって言うの。去年同じクラスだね。倅が遅いから捕まえちゃった!!!」

「

莉緒はあずの腕に自分の手を添えた。

「ああ、私、倅奈。」

不機嫌にあずにあいさつをするとあずは満面の笑みで私を見た。

普通初対面でこんな態度をとられたら不快感を覚えると思う。そのころからあず

は私の予想を”裏切る”子だった。

「あたし、あず。よろしくね!!!」

笑うあずを無視して、莉緒の腕引っ張った。

「倅! 待ってよ。あずが…」

私はあずの顔を覗む。私が遅れたのはいけないと思うが、仲良くもないのに馴れ

馴れしくする人は苦手なのだ。

いや、あずは鈍感なのだ。私が怒ってることに気づいてさえいない。「うちも一緒に行くから大丈夫だよ！」

にこにこしながら私たちの方に来るあずを私は睨み続けた。さすがに莉緒は気づ

いたようでこちらの様子をうかがっている。

そしてあずをほっておくように、私の腕を組かえた。

「行こうかつ！！倅っ！！」

私の機嫌をとるように、莉緒は私に沢山話し掛けてくる。

その様子をあずは優しい顔で見守っていた。

まるで小さい子供をしく見守る母親のように。

「早速席替えでもするか！」

と担任の川口は言った。みんな不思議な顔をして川口を見つめている。

無理もない。今日は始業式なのだ。当分は出席番号順といくとこ

が、川口はあ

えてそれを覆した。

「何番かなあ。」

莉緒がさっきの調子で話し掛けてくる。

「うち、１７番が今月のラッキーナンバーなの。１７だったら交換してよね。」

川口は体育教師で型がいい。だからくじ引きのくじもやたら不格好だ。

「一斉に開けよお！！！！せえのっ！！」

「倅、何番っ！？」

え、嘘でしょ？

「なに？固まって。どうした？」

だって…引いた番号は

「17番」

まさかそんな簡単に自分の手元に17番がまわってくるとは思ってもみなかった私

は莉緒に紙だけ見せて笑って見せた。

「倅ついてんじゃない！」

ついているのだ。

「いや、今回はやばいぞ。ちなみに莉緒何番？」

ピラと見せた紙には”13”の文字。

一見番号が近いので近く感じるが、実際まったく近くではないことを知っている

私はガクンと肩を下げた。

「離れたねえ」

莉緒に大袈裟に悲しい顔を作って見せた。莉緒は、はいはいと言って軽く頭を撫

でて私をあしらうただけだ。私は莉緒のそんなところが好きだった。

「うちの近くは海月みづきとかだけど、倅は？」

「うちは…」

自分の席を見ると隣にはあずが座っていた。

「霧島さんだ。」

わざと名字で呼んだ。あまり親しい関係をのぞんでいなかったからだ。

「ああ、霧島かあ。頑張っ！！！」

ぐつとガッツポーズを大袈裟にとった莉緒に私は不思議な顔をした。

「あれ？莉緒って”霧島”ってよんでんの？」

さっきまで”あず”と呼んでいたのだが、急に”霧島”に変わったからだ。

「ああ、うん。霧島のこと名前で呼ぶ人いないよ。さっきは自己紹介っばかった

からあずって倅に言ったけどね。」

莉緒はあはつと歯を見せて笑った。

仲良くする気もない私はふうん、と鼻をならして見せた。

「ほら自分の席に座れ」

川口の声でバラバラとみんなが動き始めた。莉緒に別れを告げて自分の席についた。

隣に座っていたあずは1人でも凜としていて何かみんなとは違っていた。

「あ！霧島あ！席近い近いっ！うち後ろ」

「うわっ！まじでっ！？いっぱい話そっ！」

あずは私の反対側を向いて名前も知らない子と話を盛り上げていた。このまま気付かれずにいくことが私の幸福だった。

「倅っ」

名前を呼ばれ、私は後ろを向いた。そこにはおなじグループの美佐が座っていた。

「席後ろ！」

にかにか笑いながら私に話かけてきた。私は笑顔になって美佐に答えた。

「よかったあ。周りシケメンだったから困ってたあ。マジ救いつ！美佐ナイスっ！」

「

美佐の手を握ると、離せ、と言うような熱い視線を感じた。

「倅い。その手やめて。」

そこにいたのは美佐の彼氏、と言えるような存在の千榎だ。

「ごめん、ごめん。」

私はパツと手を離すと千榎は美佐の頭をポンポンと自分の手で撫でた。

二人は仲良く笑い合うと私がその場に居ないかのように話始めた。なんだかんだでもやつぱ彼氏か…。

私が席に座り直しふと横を見るとあずと目が合って、頼ずえをとい

ていた手を不

意に頬から外してしまった。

「あつ……」

そのとき莉緒の言葉を思い出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6426p/>

---

白りんご

2011年1月12日20時41分発行